

幼児の音楽鑑賞

井 幡 星 子

- I. 音楽鑑賞とは
- II. 幼児の音楽鑑賞
 - 1 幼児の発達と音楽
 - ① 音に対する興味
 - ② 身体的反応の発達
 - ③ 幼児の発達の特徴と音楽
 - ④ 音楽的環境の影響
 - 2 幼児の音楽鑑賞はどうあるべきか
 - 3 幼児の音楽鑑賞の実際例
 - 4 結 び

I. 音楽鑑賞とは

鑑賞という言葉はいったいどういう語源をもっているのか、またどんな意味として用いられているのか、音楽鑑賞について述べる前にまずその意味を明瞭にしておかなければならないと思う。語源的にはラテン語の〈Appretiare〉(評定する鑑賞する)からでたもので価値が高いとか低いとかいう価値を測る意味であったが段々多義に用いられるようになり真価を知る、真味を知ると少しずつ転じて用いられ、現在では〈enjoy〉(楽しむ)の意味も含めて使われている。標準音楽辞典によって鑑賞という言葉をしらべてみるとそれは「芸術作品等を翫味しその美的内容をたのしみ理解する体験を鑑賞という。」とある。また大百科事典によれば「芸術作品の享受をふつう鑑賞とよぶ。」「鑑賞は視覚や聴覚や言語を通じて行われるからその限りにおいて感覚的受容的経験の態度が重要なのはもちろんであるが、美的対象を単に感性的に受け入れることにはつきない。鑑賞が成立するためには鑑賞者は自分の視覚的、聴覚的言語的、感性的態度のうち自分自身の生命的体験の態度をたたえていかなければならない。だから鑑賞も一つの表現活動であり自発的作用であり、創造的な活動である…」と説明されている。

では次に芸術作品としての音楽を鑑賞するとはどういうことであろうか。次に幾人かの音楽学者たちの音楽鑑賞に関する見解をあげてみよう。

「音楽鑑賞の対象となる楽曲は演奏を通して、色とりどりの音の流れとしての美を物がたる。楽曲の意味というのは即ちこれである。この意味が明確に力強くまた豊かにあらわれているのが良い楽曲であり、これが聴き手の心持によく納得のゆくように表現された場合にそれをよい演奏というのである。音楽を鑑賞するということはこの「意味」を感じとることである。……」（有坂愛彦）

「音楽鑑賞力とは、音楽を楽しむ力、音楽を理解する力、音楽を価値判断する力、この三つの力が総合されたものと考えることができる。この活動は段階的であるがしかし一つが終って次にうつるというのではなく、初めの活動は終りまでつづいていてそれに他の活動が加わってくるという形において発展してゆく。そして高次の活動が加わるに従って前の活動自身もその質が向上してゆく。……」（諸井三郎）

「音楽鑑賞とは『音楽を美的対象として受け入れること』或いは『楽曲の音楽美をきく人の心のなかにひき起すこと』であり、ただ感覚的にきくだけが直ちに対象の鑑賞であるとはいえない。感覚的なきき方を基礎としてそれに精神的なきき方が関与しなければほんとうの意味の鑑賞とはいえない。鑑賞は作曲や演奏が表現といわれるのに対して受容の活動といわれ、鑑賞は外面的には音楽をきいて受け入れることであるが、その受け入れ方には内面的にみているいろいろな段階がある。即ち感覚的なきき方からより精神的なきき方の段階も考えられるし、楽しんできききき方から理解してきききき方へ、更に楽曲を批判しながら価値評価してきき段階も考えられ、これらのきき活動を総括して音楽鑑賞といっているのである。」（文部省鑑賞の指導より）

「鑑賞とは音楽の美しさを感じさせ愛好する心情を喚起させ、音楽をより深くより賢明に育んでいこうとする音楽教育の推進力である。」（J・マーセル M・グリーン）

又奥の音楽批評家ハンスリック（1825～1904）は感情に酔う鑑賞を病的なものとして極端にしりぞけ、生成してゆく構成体を注意深く直観的にたどることを主張した。それは鑑賞意識が芸術作品の外にそれたり純粋なものをとらえそこなうことを恐れたからであるといわれる。

以上音楽鑑賞について述べられていることから次のようなことがいえるのではないだろうか。

評価する (appraisal) 賞讃する (approual) 理解する (understanding)

楽しむ (enjoyment)

と鑑賞という言葉のもつ意味は多種にわたっているが、それほどに鑑賞という言葉は複雑な意味を含んでいるといえるのではないだろうか。即ち音楽は先ず音の動きと音色だけによって感覚器官にはたらきかけ聴覚を通して私達の耳に入ってくる。その奏でられた音楽を美し

いと感じ美的対象として受け入れたとき、きく者に情緒をおこさせるのである。それは人をして楽しませ個々の心の中に賞讃の思いを抱かせる。しかしそれらは抽象的で感性的な芸術であるだけに与える感動も直截的且つ純粹である。それ故に感覺的感性的な捉え方だけでは漠然とした気分だけで終って音楽の本質をみあやまる危険があると考えられ鑑賞としては足りないと思われるのである。

哲学的詩人ニーチェは二つの対立する根源的な芸術衝動を見出し、これにアポロンのとディオニュソスの名を与えた。即ちアポロンの精神的澄明をあらわし、ディオニュソスの感性的熱狂をしめす。ギリシャ芸術の発展におけるニーチェの形而上学的解釈からとり出されたアポロンのとディオニュソスの両概念はのちに芸術体系的区分の原理及び歴史原理あるいは芸術制作の型として広く採用されるに至ったのである。さて実際には鑑賞のタイプとしてアポロンの静観型とディオニュソスの感情型にわける考え方でみると概して素人ほどディオニュソスの傾向をとり易いといわれているのは無理からぬこととしてうなづける。ロマンティックな作品は感情的態度にさそいこまれ易いのであるが、作品の刺戟によって起る感情の中のみうずまってしまうような態度はムード的鑑賞になってしまって本当の鑑賞とはいえないのである。鑑賞とは知的に理解する、評価するということが含まれているのであるから、精神面での人間の全体的活動が要求され精神の訓練がなされるのである。従って娯楽的な安易な態度で音楽を享受することではないのである。心身の疲れをいやすために音楽をきくのもよいであろう。一人静かに絵を眺めるのもよいであろう、また楽しんで音楽をきいたりムードをつくりあげるために芸術作品を利用することもあるであろう。しかしいくら音楽をきき絵をみつめていても感覺によって情緒をおこさせるだけでは真の鑑賞とはいえないのである。再び繰り返すならば、鑑賞とは知的に理解する、評価するということが含まれているのであるから、作品の構造、構成を客観的、分析的にとらえる方向に展開する知性的態度でなければならないと思うのである。即ち音楽のアポロン性を追い求めなければならないのである。理解してきくということは、作曲者がその音楽において表現しようとした音楽的意味をとらえてきき、精神内容として把握することである。それは対象である音楽を主観的に受け入れると同時に客観的に観察しつつ対象を感知していかなければならないのである。この場合一つの音楽は確かに作曲者自身の一定した音楽的意向をもっているわけであるが、鑑賞者はその音楽性において人間性において全く異っているので共感ということはあるが、鑑賞者とは作曲者同一の精神内容をもつことは勿論のこと鑑賞者相互においてもそのようなことはあり得ないわけである。作曲家は自己の生命的な力に与えられる刺戟によって制作の衝動を感じ、音を時間の進行中に組織的に組み合わせることにより人間の精神内容を音楽として表現するという時間的芸術の創作活動をいうのであるが、鑑賞者はすでに出来上がった

芸術としての音楽をきき、それを通して個々の感動をつくりだしてゆくのである。その音は発せられると同時に消え去ってゆく物理的現象であるが、その消え去った物理的な音は人の心のなかに精神的な像を残すのである。それはつまり曲の楽想を感じとることであり気分をつくりだし情趣を抱くこととなる。ところで同じ音楽をきいても心のなかに描かれつくりだされるものは個々によって異なる。芸術の精神が我々のものとなるのは各自がもてる力によって実感し得た範囲に限られるのである。即ち鑑賞者の人間的内容に比例して行われるのである。従って芸術鑑賞は自己の力を正しくあらわすものであるといえよう。教えられ学んだものの積み重ねが自らのなかに消化され感じる力となって自らの力に応じた理解する喜びが得られ自由な鑑賞ができ、各自の段階において創造活動を行えるところに鑑賞が一つの意味をもってくるのである。

鑑賞の対象となる芸術作品は、作品を通して自己をあらわすという創作の行為であるが、鑑賞は作品の制作と方向が反対で、作品を自己のなかにとり入れて味う受動的な美意識であるから、受動性と自己中心的な主観の状態性があることはあらそわれないが、あくまで客観的な作品についての鑑賞であるから、作品のなかへ積極的に参加し自我と作品のなかへゆだねる客観的志向性があるのである。そして作品の制作ほど能動性はないが、作品へ積極的に接近し追体験的に作品を拡充しながら芸術的な意味を内的に発見してゆく、客観的に存在する美を主観的に発見してゆく活動であり、その意味において創造的要素をもった行為なのである。このことについてもう少し考えてみるならば、純粹感情芸術である音楽の場合、一つの音楽を時間的な音の流れとしてきいても文学をよむようには直接意味をくみとることはできない。しかし何回か繰り返しきいているうちに楽想を感じとることができ、心のなかにあるまとまった情趣を抱くことができるのである。それが創作なのであり、それが鑑賞なのである。鑑賞は形としてあらわれてこないが心のなかでの創作ということができるのである。外界と遮断された心の内界に自分だけの世界を築きあげ各自の創造の世界をつくりあげるのである。J・L・マーセルは音楽の鑑賞において創造的応答という特有の用語を用いているが、それは、鑑賞は創造的表現の予備的機会をつくり、創造のひらめきをもたせるに大いに役立つものであると考え、創造的応答に導く機会を鑑賞活動は多分にもつもので、新しいものが生れる動機をつくるという意味において創造的という言葉を用いている。ともあれ音楽鑑賞は一般に内面的、受容的活動とのみ考えられ勝ちであるがそれは創作を生み出す最も根源的要素をもつ活動なのである。而して鑑賞することによって得られる体験内容は人間の形成とともに発展してゆくのである。

次にここでどうしてももう少し究めておきたいのは音楽鑑賞の対象となるのは芸術作品としての音楽でなければならないということである。即ち人が創作したものはどんなものであ

ろうと凡て鑑賞の対象となり得るのではないということである。では芸術的音楽作品とは一体どういう条件をそなえていなければならないのであろうか。どういうものが芸術作品として認められそれに価するのであろうか。人間の創作的作品を同じ人間が芸術作品であるかないかをきめるのであるからこれは甚だむつかしい問題となってくる。しかし我々は鑑賞について真剣に考えてみるときに、やはり対象である芸術作品の本質についてのはっきりした見解をもっていなければ真の鑑賞はできないと思うのである。音楽辞典によれば現在のように文化の特殊な一部門をなしているものとしての厳密な意味では芸術作品とは「ある人格がその天才と熟練とによって自己の創造的直観的に把えた美的理念を、それに完全に適合した独自の客観的形象にもたらす生産活動とまたその成果をさす。それは原則的には一切の功利効用からはなれ、それ自体でみち足りた目的活動であり、ただそのはたらきのみによる純粋な満足を導く。……」となっている。人間の創りだす芸術には文芸、音楽、絵画、彫塑、工芸、建築、演劇、舞踊等があるが、これらの作品を創りだすには直観か天才的ひらめき、構成力、審美眼、創造力等々の天才ともいべき才能が要求されるのである。しかし、才能だけがあれば芸術作品が生れるのではない。芸術という言葉の語源はギリシャ語では「模倣」「技術」であり、ラテン語では「技術」であるように、もとは技術と同義なのである。技術は生来のものではなく、熟練によって積み重ねられてゆくべきものなのである。才能と熟練とによって生みだされた作品は、創作者の全身全霊を集結して生産された完全なる調和の結晶なのであるし、またそれでこそ優れた創作者の作品であるといえると思うのである。従って芸術作品をつくりだすこと、それはまさに生みの苦しみともいべきものであって、一つのを生みだし完成させることは並大抵のことではない。しかしそこにはまた創りだすものの無限のよるこびがともなうのである。芸術作品とはそういうものであると思うのである。従って優れた創作者が全身全霊を傾けて創りだした作品には人の心をとらえずにはおかない、人の心をひきつけずにはおかない、謂わば磁石のような力をうちに秘めているのである。それがあるときには人をして涙を流させ、歓喜の思いにひたらせ、悲哀を感じさせるなど、人の心に何らかの情趣を抱かせることとなるのである。しかし人の心に訴えるものがあるからといって芸術作品は凡て同じものではないことは申すまでもない。人の顔が夫々異なる如く、その思いもまた千差万別で創作される芸術作品は創意にあふれたものでありその人をあらわす。多くの人間が交わり合って人間社会のなかで生きるとき、生き方において、物の見方、感じ方等において共感をもつことのできる人々を見出すことができるように、多くの創作者が生みだした芸術作品のなかから我々は理解と感動を覚える作品を見出すのである。

また一人の人において芸術作品だからといってどの作品にも必ずしも感動が呼び起こされ

るのではない。共感を覚え感動を起こさせるその根底には人間と芸術とを結ぶ根本的要因として好嫌の感情を無視できないのである。鑑賞の第一段階である楽しむということがより豊かになるためには、対象である作品をまず好み愛するという態度がなければならないし、その気持がないならそのよさを開いてゆくことのできないのが芸術というものだと思うのである。そして更に一人の人間にとって芸術の価値があらわれるのはその内容を発見し、認識し、自己の精神生活のなかで生かすことのできる時である。自らが納得できるものであってこそはじめて我々はそれを自らの生活のなかにとりいれるのである。そのときはじめてその芸術作品はその人にとって意味をもってくるのである。従って芸術的に優れているとされた作品であってもある人にとっては少しも心に訴えるものがない場合もあり得るのである。しかしだからといってその作品が価値がないということではないのは勿論である。

人間という存在が環境から離れては生きてゆくことのできぬものである以上、一個の人間が生をうけてよりその死に至るまで一定の変らざる環境のなかで生きることは殆ど不可能である。そのなかで人間がより充実した人生を築くために求め産れたのが芸術なのである。それは歴史の流れのなかで、時代にとってまた人々にとって願い求めることが異なる如く生き方が異なる如く、従ってその人間の生み出す芸術は変転きままりないものであるといえる。而して芸術とは固定したものではない。それは限りない変化と展開の可能性を秘めたものなのである。そしてその理解ということにおいてはどこまで積極的に反応するかによって一人の人間にとって芸術がどれほどの価値を占めるかというその度合がちがってくるのである。

II. 幼児の音楽鑑賞

1. 幼児の発達と音楽

① 音に対する興味

嬰兒の時代は自分自身ではまだ動くことのできない受容の時代であるが五官の感覚器官は活動を開始しつつある。特にそのなかでも外界との直接のつながりをはじめにもたらしものに聴覚がある。生後一週間位から発達しだす聴力は、音を与えたときの反応が大人と同じ脳波の形に成長するのは三ヶ月ごろであるところから、聴力は三ヶ月でほぼ完成すると考えられている。音に囲まれて生きている人間にとって、取捨選択の余地なくあらゆる音が耳に入ってくるのであるが、それらの音に対して示される反応はまことに興味ぶかい。

音に対する興味に関して A・ゲゼル、その他多くの人によりいろいろと研究がなされているがそれは大体次のようである。

はじめの1カ月は大きい音や強い音に対して体全体をふるわせておどろく。オルゴールや周囲からきこえてくる音楽を静かにきき、音のする方へ顔をむけようとし、母の声をきいたりうたなどをうたってやると泣きやみ、ニコニコしたり或いはスヤスヤ眠る。

2カ月目になると大きい音や強い音に対する恐れはそのままであるが1カ月のときのように反射的に恐れるのではなく、抱っこをしていたり熟睡しているときなどは平気である。気嫌のよいときは音にあわせて声をだす。音に対してはちきれそうな関心を示すので相手になってやると音、特に人間の声に注目しよるこんで話すように声をだす。

3カ月になると体全体で恐れをあらわしていたのが泣くことによって表現するようになり、目が見えるようになった赤ん坊は夜の時間に音を恐れるようになる。また音のする玩具の音をだしたり静かにきいたり話しかけたりする。母の声、父の声がわかりだす。自分で声をだしそれをきく。子守唄をうたってやるとスヤスヤ眠る。音楽的な調べや歌などを体験したいと願う。

4カ月、じっと耳をすまして小さな音をききわけるようになる。音のする玩具でひとりで遊び楽しむ。音とそのあとにくる状況がわかるようになる。

5カ月になると遠くの音もきこえるようになり外にではじめてきく音におどろく。他の子どもの泣き声につられて自分もなく。オルゴールなどの静かな音をきいて眠る。家族の声をよく覚える。話しかけられると体全体で手足などをバタつかせて喜ぶ。にぎやかな話し声のなかに一緒にまざろうとする。ひとり言を楽しむ。

6カ月頃から手足の動きが活発となり、自分で音をだすことに興味をもちだす。音の出るものをいつでもならそうとする。静かなレコードをかけてやると一人で眠る。音声の繰り返しをよろこぶ。声の高低に反応する。こどもの声をきいたりこどもの歌をきくのを喜ぶ。よくしゃべるようになる。

7カ月きこえてくる音楽に手足を動かして喜ぶ。音のするものをたたいて音をだして遊ぶ。

8カ月 リズミカルなメロディに興味をもち、まわりの真似をしはじめる。にぎやかさを喜ぶ。

9カ月 音楽がますます好きになり音楽に合わせて体などを動かしてリズムをとる。シロフォンやピアノなどの音をだしてみる。こどもの声にひどく興味をもつ。また大人の話声や笑声をきいて一緒になって喜ぶ。そして声のする方へ近づくようになる。

10カ月 音の一寸したちがいや音のもつ意味がわかるようになる。(電話の音、玄関のブザーの音など)手あたり次第にたたいたりふったりして音をだそうとする。笛やラッパがふけるようになる。人に大声でよびかけたり大声をだしたりする。

11カ月 音楽がきこえてくると手を上下にあげさげしたりパチパチたたいたりする。母親の口ぶりを真似る。本をよんでもらうと喜ぶ。

12カ月 音楽への関心が強くなり音の出るものをたたいたりして研究する。

1才児 リズムに反応することもできるようになりリズムを喜ぶ。

15カ月 音楽をきいたりそのリズムにあわせて踊ったりする。リズムカルな音楽には腰をふって反応する。

18カ月 音楽によって全身にリズムをつけて体をゆする。鼻うたをうたったり、たった一つの言葉を繰り返してうたう。ラジオをつけて音楽に合わせてダンスをしようとする。気のむくままに鼻うたをうたったりする。ベル、口笛、時計のような音に非常によく気がつく。音楽には全身を動かして衝動的に反応する。2、3分の間音楽に耳を傾け、リズムに合わせてはねとぶ。

24カ月、保育遊戯の歌に耳を傾け、大人と一緒になつくり返すのを喜ぶ。リズムカルな運動のできるものが好きでこういったものが歌を自然にさそいだすことがある。

30カ月 いくつかの歌を或るときは完全に、あるときはとぎれとぎれにうたう。音楽に夢中になり特に前々からのおなじみの曲のくり返しを喜ぶ。楽器、特に蓄音機に強い興味をもつ。ラベルの「ボレロ」とかバンド音楽などの特別のリズムを喜ぶ。耳の鋭い音楽の才能のある子どもはこの年齢では蓄音機におそれをみせることもある。

3才児 簡単な音の調子にあわせはじめる。いくつかのメロディをはっきりと認識することができる。音楽の器具をいじってみる。歌や楽器について簡単に説明してやると大喜びをしましたその興味もます。音楽をきく興味や能力にはかなりはっきりした個人差がみられる。

4才児 一つの歌をはじめから終りまで正確に歌える子どももぼつぼつでてくる。遊びながら歌をつくり、楽器をいじってみるのが好きである。メロディをききわけて喜ぶ。

以上発達をおって音に対する興味や音楽に関する反応を調べてみたのであるが、それによってもわかるように単なる音から音楽と名づけられるものに至るまでの巾をもつ、聴覚を通して入ってくる音に対する反応は極く幼い頃にはじまり、特に音楽的な音に対する反応ははっきりあらわれてきており、言葉を理解する以前に音に対して強い関心を示していることがわかるのである。そして年齢がすすむと共にその反応は大きく敏感になり、且、有機的な連関のもとに能動性が加わり次の段階へのよき一步をすすめているのである。そこに音に対する興味から音楽鑑賞活動への芽生えをみることができると思うのである。

② 身体的反応の発達

自分自身では動くことのできない受容の時代にあった嬰兒時代を経て身体の発達がすすむ

につれ、きこえてくる音楽に対して子供は身体的な反応を示すようになる。誰から教えられるのでもなくしめされるこの自然のよろこびともいうべき反応のなかに音楽のもつ魅力あるいは訴えかけをみることができる。手、足、体が自由になるにつれて子供の音楽やリズムに対する反応は目だってくる。ゲゼルの観察によると1才になるとリズムをよろこびこれに反応することができる。1才3カ月にはリズムにあわせて踊ったりリズムカルな音楽には腰をふって反応する。1才半になると音楽によって全身にリズムをつけて体をゆすり、ラジオをつけて音楽にあわせてダンスをしようとする。2才になると、とびはねるとき、膝を曲げたり腕をゆすったりブラブラさせたり、頭をコックリコックリしたり足をバタバタしたりする。リズムカルな反応がお気にいりである。3才になるとかなりよく音楽にあわせてギャロップをしたりとびあがったり歩いたり、走ったりするようになる。

この音楽に対する自然な身体的反応を通して考えられることは、幼い子供にとって音楽は身体の動きをさそいだすものであるということである。子供の高度な精神活動は感情と筋肉運動とによって成長してゆくといわれる。この二つのものが一緒に起って一つのニュアンスをつくり筋肉運動の反復は感情にある種々の傾向をつくってゆくのである。とすれば音楽によって誘発される自然な身体的反応の発達の子供の音楽へのアプローチに重要な意味をもってくると思うのである。従って幼児期における音楽鑑賞は身体的反応を伴いつつ行われることも重要な要素の一つであると思われる。

③ 幼児の発達の特質と音楽

幼児期における音楽鑑賞はどうあるべきであるかについて考えてみる場合に、音楽鑑賞に特に関係のある感情的情緒的発達、知的発達がどのような発達を示しているかを論外におくわけにはいかない。正しい発達の状態が理解されてこそはじめて適切な指導がなされることは自明のことである。音楽をきくことによってどの程度の情緒状態が作りだされ、またそれにどの程度の知性がはたらきかけるか、即ち幼児の知的、感情的情緒的発達がどのような状態にあるか、また二つがどのように関係しあっているかということがあきらかにされねばならない。古の偉大なギリシャの哲学者アリストテレスは、人間には感情と知性の二つの魂があることを指適しているが、この比重は人間が成長発達するものである故に年令と共に高まってゆく。心理学における幼児のその発達をたどってみるならば、幼児の生活においては情緒はその重要さにおいて、のちのどんな時期におけるよりも重い意義をもっているといわれる。まず主だった情緒は幼児期のうちに一通りはあらわれること、またその分化の著るしいことが注目されるべきである。そして幼児の精神生活における情緒の支配力は絶対的なものなのである。即ち幼児の精神生活の中心を形づくるものは実は情緒なのであるということ

である。しかも知的な色あいの濃いのはたらしきにおいてさえ情緒は非常に強い力をもっているのである。A・トリスはその著書「乳児及び幼児の教育」の中で、“小さな子供の場合は知性は殆どみられない。感覚だけがある。彼にとっては情緒こそはその記憶を定着させる最大の手段である。ちょうど大人が記憶を定着させるのに注意力を最大の手段としているのに相当する。”と、書いている。また、“人間の子供は情緒的動物なのである。”ともいっている。では一体幼児期に著るしい発達をとげる情緒は何によっておこるのであろうか。情緒というものは人間の内面から自然に起ってくるものではない。そこには必ず外界からの刺激があるのである。情緒のはじまりともいうべき感情の動き、もう少しさかのぼれば興奮という言葉であらわされる状態は、新生児にとって唯一の外界との直接機関である感覚器官によって呼びさまされる。それは即ち味覚、皮膚の感覚、嗅覚、視覚、聴覚、である。このなかで今とりあげようとしている問題は音楽鑑賞なのであるから、感覚器官のなかで関係のある聴覚である。はじめは単なる音として捉えていたものが成長発達をとげてゆくうちにそれら種々の音のもつ性格や意味を理解してゆくようになるのであるが、これらの音や音楽をきくことによってある情緒状態がおこってくるのである。大きい音、強い音を恐れ、叱る声の調子をやがてききわけ不快な情緒をおこすのであるが、子守唄で眠り、リズムカルな音楽で手足を動かし、美しい音楽にききいるということは快の情緒を起させるのであることがわかるのである。而して大人と殆ど同じ情緒をもっているといわれる幼児は、音楽によって著るしく情緒をかきたてられることが音に対して示す興味によってわかるのである。

では知性の発達は幼児期においてはどのような状態にあるであろうか。以下山下俊郎氏の「幼児心理学」を参考にすると次のようである。注意力、記憶と模倣、理解、思考力の著るしい発達がみられるようになるのであるが、更にこの時期には言語の発達、空間、時間、数の概念に対する発達がみられ、特に記憶力、思考力などには幼児期独特の全体的記憶、自己中心性、思考の具体性、行動性などがある。知的発達はまだまだ成長発達の途上にあり、情緒の発達に比べおそいということがいえると思うのである。先ず記憶については再認ができるようになり、3才すぎると1年位にのび、4才すぎると1年以上、場合によっては2年以上たったことでも再認できるという発達がみられる。また強い感情を伴う経験や興味をそそる事柄が記憶に強く残り、再認されるといった感情の影響があるのである。このことも3才の頃非常にすすんで一つの段階を劃するのである。再認よりはもう少し積極的な思い起すはたらしきについてはどうであろうか。2才すぎると2、3カ月前のことでもよく思い出すようになり、年齢が大きくなるにつれて、前の経験とそれを思い出す時間は長くなってゆくのである。またもう一つの子供の記憶の一面は、3才以前では目ではっきり形の見られる具体的なものに限られていたのが、3才を境目にして無形的なことの記憶、即ち言葉でいいあら

わされたこと、ただきただけのことに対する記憶がはじまる。記憶の大きな特徴としてもう一つあげられるのは全体的記憶である。即ち幼児は歌にしてもお話にしてもよくおぼえるが、これらを一つの全体として覚えてゆく。一部分は全体の一部分であって一部分だけをきり離すことはできないのである。注意力はどうであろうか。一般に幼児というものは元来注意力が非常に弱く、次から次へと注意がうつってゆき易いものだと考えられている。そしてこのことは一面たしかにそうなのであるが対象によっては違ってくるという他の面があるのである。即ち努力を要する注意の場合、山下氏はマイルスのびっくり箱の実験をあげびっくり箱のような興味をそそるものにおいてすら幼児の注意力は3~4才の子供で8秒、5才で16.3秒、6才で27.5秒できわめて貧弱であることを示している。しかし自然にひかれる注意、即ち注意をむけられるそのものが幼児の興味をひく場合、驚く程の注意力を示すことは幼児に接する人の経験するところである。そしてこの注意力は3才頃が非常にのびる時期であると考えられている。又注意の集中の強さはビューラー夫人の調べでは、4才で急に強くなっていることが示されている。従って注意の発達において幼児の注意力が貧弱であるといわれると同時に持続時間、強さにおいて、興味のあることに対しては思ったより注意力があることを知るのである。一方思考力はどうのような発達状況であろうか。幼児の思考の特質としてあげられるのは具体的思考ということである。即ち幼児の物の考え方は具体的なものや行動によってすすめられていくことである。宙で考えることは幼児にとっては非常にむづかしいのである。もう一つは言語的思考において自己中心性をもっていることである。即ち言葉を使って宙で考える言語的思考になると幼児は物ごと凡てを自己中心、自分本位に考え、他人には一切おかまいなしに話をするのである。この自己中心的言語的思考は社会生活を、自己以外の立場を認識することによって卒業してゆくのである。

以上幼児の知的発達における主なるものについて述べたのであるが、先に述べた情緒的な発達と知的発達とはどのように作用し合っているであろうかが次の問題であると思う。感覚的なものによって起った情緒は知性によってどう処理されるか。感情を知性で抑える、又逆にどんなに知性をはたらかせようとしてし衝動的に感情に支配されてしまうといった経験を日常生活において我々は自ら経験することであるが、これは感情と知性が一見、別々のものようであるがそれでいてきつてもきり離すことのできない深い関係にあることを示していると思う。幼児期の知的発達に対する情緒のはたらきかけは大きいので、物ごとを感覚的情緒的にうけとる可能性が強いのであるから、幼児の知的発達の特徴をよくとらえ効果的な指導がなされることによって二つのはたらきを互いに関係させつつ精神生活が形成されるよう考えられなければならないのである。

而して音楽鑑賞という活動は直観的に感覚的にその美をとらえてゆくと同時に音楽のもつ深い内面性を理解しつつきくことが要求されるわけであるから幼児期における発達的特質を理解しつつこの時期に適った適切な指導がなされることによって幼児をより正しい方法によって音楽へ近づけることができるのではないだろうか。

④ 音楽的環境の影響

赤ん坊は母親の胎から裸で生れてくる。もって生れてきたものといえば裸の体だけである。いいかえれば一個の素材としてこの世に生を受けたとはいえないだろうか。夫々の両親より夫々の素質をうけついで生れ出た一個の生物体がどのように成長してゆくか、人間は環境を離れては生きることができないが、このことは環境と素質が有機的に結ばれていることを意味していると思う。素材としての全く無力な赤ん坊ではあるが、またそれ故に無限の可能性を秘めているのである。特に環境如何によってどのようにでもこの素材は造られてゆくのである。まだ言葉を話せない生れたての赤ん坊は両親や周囲の人々の語る言葉をきいて自然のうちに自国語を覚えてゆく。そしていつの間にか国語が話せるようになってゆく。物ごと凡てにおいてよい悪いの判断のできない子どもはそのまま凡てをうけいれてゆくのである。音楽をきくということにおいても同じことがいえないだろうか。心身ともに柔軟性に富んでいると思われる子供は、その周囲の空気に影響され易いのである。前に述べたように音に対する子供の感受性はひじょうに敏感であるが、その鋭敏な感覚で周りの音を吸収してゆくとしたら、どのような音楽的環境に育ったかということは将来において東と西程に離れたものになるであろうことは想像に難くないのである。特に手足が自由にならない嬰兒の時代にはたらく感覚器官のなかで聴覚は重要な役割をすることとなるのである。どのような音楽をきいて育ったかということによって人間の音楽に対する方向性がきまると思うのである。従って音楽的環境の影響は正に重大であるといわねばならない。耳から入ってゆく音楽は心の中に積み重ねられてゆく為にどのようなはたらきかけをしているか確証を得ることはできないのであるが、目に見えない音楽的滋養を与えつづけてゆかなければならないし、音楽的成長を望むものに課せられた責任とみなしてもよいと思うのである。

2. 幼児の音楽鑑賞はどうあるべきか

さて以上の幼児の発達と音楽がどんな関係にあるかを考慮に入れつつ幼児期における音楽鑑賞はいかにあるべきかということについて考えてみたいと思う。

音楽は作曲者の感情、思想を音によって訴えようとした芸術である。人間の初期、即ち生れたての赤ん坊が音に対して反応を示すことは前述したが、それは音と感情が深い結びつき

をもっているからであり、凡ゆる芸術の中で音楽が最も感情と直結している芸術であると思うのである。子供は感情的動物であるといわれるがこの子供の感情を音楽の感受性を高めることへむけていくことが先ず考えられなければならないことであると思う。芸術すべてにおいてこの感受性はその基本であるが、言葉や形に定着させることのできない音楽では特にこの感受性が大きな問題となってくる。感受性とは外界のあらゆる刺戟や印象をうけいれる、物を感じとる能力であるが、この音楽の感受性を如何にして高めてゆくか、そのためには音楽が好きになるように音楽的経験を積み重ねてゆく以外にはないと思うのである。しかも楽しいものとして経験がつけられてゆくところに音楽を愛好する方向づけがなされる。幼児期においては楽しい経験をすればする程人格が円満に発達するといわれるが、感覚的次元において楽しい、面白い、愉快な、素的な、素晴らしい、美しいといった自分の感覚をもって味う感性に訴えた音楽をきく経験を数重ねていくことが望ましいのである。そしてこのことが楽しい経験となるためには二つの面から考えられなければならないのではないだろうか。即ち与え方と選曲である。この両面についてまず考えてみたいと思うのであるが、楽しい愉快な鑑賞の経験をさせるためには選ばれる音楽は明朗、爽快で潑刺とした健康的な音楽でなければならない。曲想がきいていて楽しく明かるく、素直さ、清潔感、無邪気さ、単純、素朴さにあふれた曲が望ましいのである。また子供の注意の集中時間は「幼児の発達の特質」のところで述べたのであるが非常に短く、特に緊張度の高いほど集中時間は短くなるのである。子供がきこうとする姿勢を示せるのは数分である。従って短い曲を与えることが必要なのである。又子供は音楽をきいたとき、その刺戟に対して感覚的直接的に反応してくる。音に対して音楽に対して身体的反応を示すことを「身体的反応の発達」のところで述べたのであるが、直接的な反応のあらわれとして身体的表現をしてくるのである。即ちリズムにあわせて体を動かしたり、声をだしたりする。このことは鑑賞と表現とは切り離すことのできないものであることを裏づけると思う。即ち鑑賞という行為は表現するという行為につながるものなのである。或る時には絵画的に表現し、或いは文体的反応を行い、身体的表現による反応、或いは創造的反應として何かをつくりだす。音楽をきくことによって種々の形を通して表現されるのである。幼い子供は身体的に表現しつつ音楽を感じとってゆくのである。年齢が小さければ小さい程、このような直接的反応が鑑賞活動の主体となることに特徴を見出すのである。従って子供のリズム反応をよびますような興味にあふれた音楽を与えることによって音楽をきくことを楽しいものとすることができると思うのである。従って幼児期には静かに黙ってきくという態度だけが音楽をきく態度の凡てではないと思うのである。幼児にとって音楽を感覚的に受け入れ鑑賞の第一段階である楽しい経験とすることは、適当な指導がなされれば左程困難なことではないと思うのであるが、知的に理解してきくということ

がどの程度できるものであろうか。感情面、情緒面での発達は幼児期において相当の発達をみせるのであるが、知的発達はその思考形態、言語生活、時間の観念、数観念などは大人のそれに比しまだ未発達の状態である。例えば思考力を例にとってみるならば、幼児の思考の特徴は具体的なものや行動によってすすめられてゆく具体的思考の時期である。すべて具体性をもったもののみが思考の対象となるのでありまた行動を通して思考がなされるのである。従って表現されている音楽をただきくだけでは感覚的に音楽を楽しむきくことにおいてはそれでよいのであるが、少しでも知的に理解してきかせようと思うならば、音楽の内容を話を通してきき或いは目で見、手でさわったり行動にあらわしてみることによって幼児の知的理解は深まるのである。その点から音の美的、形式的構成のみで音楽の最高表現をしているフーが、ソナタなどの絶対音楽よりも、文学的絵画的内容を、音楽表現を心理的、感覚的に生かし音の機能を総動員して構成された標題音楽の方が理解し易いと思うのである。またリズム、メロディ、拍子、和声などの抽象的音楽用語を言葉として理解することはできない。但し音楽に流れているリズム、拍子を感じとること、音のハーモニーからうける美しさを感じ知することはできるという形において音楽を理解することができるのである。また音楽に用いられている楽器について見たりさわったりどんな音がでるかを知っている場合には使われている楽器をききわけることによって知的理解を深めることができる。また、メヌエットはどんな踊りを踊る曲であるかを見て知っている方が、ただ踊りの曲であるということだけがわかってきくよりも知的に理解してきくことができるといえよう。

幼児に音楽を与える与え方として音楽を楽しんで感覚的にうけとめてきくことと知的に理解してきくこととは別々に考えられないのである。幼児の心理的特徴である情緒性ということとは心のはたらきは情緒によって色づけられるのである。情緒状態を無視して知的なものを与えられてもその効果は望めない。情緒の支配力は知的なはたらきにもひじょうに強い力をもつのである。即ちもう一つの幼児の心理的特性である未分化性ということに帰着するのである。即ち情緒と知性が分化していないということなのである。そしてこの未分化性ということは鑑賞活動と、歌う、リズム活動をする、楽器を演奏するなどの他の音楽的経験やまた幼児のすべての生活ともきり離しては考えられない。幼児の生活とは遊びである。遊びながら子供は生きてゆく。遊びの中において子供は凡ゆる成長発達を遂げてゆくのである。その意味で鑑賞活動もまた遊びの要素をも含んでいることが望ましいのである。また与えられる音楽は偉大な深遠な感情の結晶である秀れた音楽でなければならないが幅の広い視野から幼児に与えるに適切な音楽が選択されるべきであると思う。そしてそれらは一回限りではなく数回きかせることが望ましいのである。何回もきいているうちに、一回きいただけでは得ら

れない音楽の美しさを感じとってゆく。全体に子供は繰り返しを喜ぶが鑑賞においても同じことがいえると思う。

最後に真の音楽鑑賞活動においては、正しい評価ができなくてはならないのである。対象である音楽を主観的に楽しく受けいれると同時に客観的に観察することによって価値判断してゆく方向へむけられてゆかねばならない。対象をできるだけ確実に自己のものとするために重要なことなのである。音楽性の成長と共に楽曲の価値評価する能力が加わり鑑賞能力が成長してゆくのである。幼児の段階においてこのことはどうであろうか。評価をするということは自己を離れてはじめてできることである。ところが幼児期は自己中心性の非常に強い時期である。このことは客観的立場にたつことの困難であることをあらわすのである。また価値評価の能力は経験が浅いとできにくいことは何ごとにもいえることであるが鑑賞においても同様であると思う。従って幼児期における鑑賞活動においては音楽をきくことに興味と関心を持ち、音楽のもつ美しさに理屈を越えて共感し楽しんでゆく段階、そして或る程度の知的理解を通してより深く音楽をきこうとする方向づけを与えつつ音楽的、人間的成長をその背後に考えなければならないのである。

3. 幼児の音楽鑑賞の実際例

幼児期においてはどのような音楽を選択しどのように与えたらよいかを幼児に実際に音楽を与えた例を通してこの問題についての考察をすすめてみたい。

●カッコウ ワルツ ヨナーソン作曲

使用レコード コロムビアレコード「母と子の音楽教室」より KK5018

所要時間 約2分

一日目にはじめに何もいわないで全曲をきいた。曲の中にでてくる「カッコウ」の鳴声がある一人の子供の耳に入り、「アッカッコウや」といって、カッコウ鳥について知っていることを私に話しかけてきた。ある子供たちはそれを興味深げにきいていたがある子供たちはしゃべっている子供の話をきくともなしに音楽に合わせて腕を振ったり首をかすかにふったりしていた。曲が終わったので「今の音楽、何の音楽かわかる？」ときいてみた。するとさっき私に話しかけてきた子供ともう一人別の子供が「カッコウ」といった。そこで私は「カッコウっていう鳥がいるでしょう。知っていますか？」ときいたら知っている、知らないと様々の返答がかえってきた。知っているといっても名前だけきいたことがあるという程度に知っている子供、山でみたという子供、その真偽の程はわからないが沢山の子供が積極的に反応してきた。そこで「これはカッコウという鳥の鳴き声をいれて、ワルツという踊りの音楽に

したものです、と話し、カッコウというなき声は何回も出てくるからもう一度よくきいてみましょう目をつむってきいてもいいですよ、といっつも一回かけた。するとカッコウの声をききとろうとするのか瞳をこらしてきいている子供、目をつむってきいている子供、指を折ってカッコウのなき声を数えている子供、カッコウとなき声のでてくる度に一拍おくれてカッコウ、といっている子供、手足を踊るように動かしている子供という風に一回目の時よりもずっと集中して音楽をききとろうとしている様子が見られた。しかし曲の終り頃になるとはじめの集中態度は大分乱れ、隣の子供とつき合っている子供もあった。つづけて二回全曲をきかせたのはどうであったろうかと思いつつその日は終わった。その次にきいたのは一週間後である。又何も云わないで音楽をかけた。するとカッコウの音楽やね、と口々にいい出した。そして楽しそうな表情をしながら両手の人差指を2本だしてふりながらきいたり、口に手をあて、いかにもカッコウのなき声そっくりに真似しながらカッコウ、といったりしだした。そこで区切りの所でたんレコードをとめた。そして、どんな鳥がカッコウってないのでしょね。大きい鳥かしら？小さい鳥かしら？、ときいてみた。これ位の鳥や、と手で大きさを示す子供もいたが殆どの子供は、知らない、と。そこで用意してきた図鑑の写真を大きくしたカッコウ鳥の絵を見せたら非常に興味をもって見入った。そして手でくちばしを作ってカッコウ、とないたりした。この鳥の本当の鳴き声をききたくない？、ときいたら口々に、ききたいといっただけでカッコウ鳥の鳴声の録音されたレコードをきいた。アッ本当の声！本当のなき声や、と本当にききわけられるのかどうか知らないがある子供がいった。じゃあ今度は音楽の中のカッコウはどんな音でなっているでしょうね。ピアノでも同じ音がでるかひいてみますよ、といっって同じ高度でひいてみた。さあカッコウワルツの音楽をよくきいてみましょうね、といっってカッコウ鳥の絵を見えるところにおきレコードをかけた。（このレコードではカッコウの鳴き声をアコーディオン、そして他に木琴、ハモンドオルガン、ピアノなどの楽器が使われていた。）ある子供たちはカッコウ鳥の絵となき声を結びつけようとしているのか交互にレコードと絵に目をやり乍らきいていた。男の子たちは手を口のまわりに円くまらめてカッコウ、になりきったような声をだしていた。なりはじめたらすぐアッ ヴァイオリン、オルガン、などといった。ピアノでないことだけはわかるのかピアノという子供はいなかった。途中で木琴がでてくるところになった時、木琴、木琴、といい乍ら木琴をたたく真似をし出した。先生ピアノの音もするよ、といった子供もいた。子供の中にいかにも踊りたそうに体を動かしている子供（女兒）がいたので、踊りたい人は踊ってみましょうか、といったら女の子全部と、男の子の数人を除いて皆おどりだした。このあと何回かこの曲をきかせたがカッコウワルツとわかると歓声をあげんばかりに楽しそうに喜んでいく。アコーディオンの実物を見せ音をだ

してきかせることによってもっと具体的に結びついたものとするができると思うのである。興味をもたせつつ楽しくきく経験の積み重ねのうちに自然に曲に流れている美しいメロディを感じとり身体的反応をすることによって3拍子を体で捉え、曲のあらわそうとしている表現を幼児なりの知識を動員して理解することにより少しでも深くとらえつつ音楽に対する感受性が養われてゆくと思うのである。

4. 結 び

芸術である音楽を鑑賞するという非常に高度な活動が人間に与える影響を考えると、音楽がどのような形で先ず子供へ近ずきはじめ、それが正しい方向へすすめられる為には人間成長の極く初期にあたる幼児期という時代に音楽に対する興味の芽生えをどのように指導していったらよいかについて考えてきてみたのであるが、幼児期という身体的、心理的に発達途上にある非常に独自性の強いこの時期をよく理解していないと鑑賞活動ということの観点からだけでは折角の指導も目的を達成できないのではないだろうか。

幼児期という未分化の時代にあって幼児は凡てをその生活のなかでとらえつつ成長してゆく。その生活の中身を豊かにする意味において音楽的環境が整えられてゆかなければならない。更に音楽は美しく、楽しく、面白いものであるということ、感じさせるためによく選択された音楽を与え、又、幼児の好む童話の世界を音楽で表現したものやこどもの知っている歌、リズム活動をさそうようなリズム的な曲などを繰り返しかせたいものである。また音楽に盛られている内容を具体化することにより知的理解を深めることも或る程度可能であり、その為の幼児期の段階にあった方法が考慮されていかなければならない。そしてこのことは楽しい、面白い経験を少しでもそこなうことがあってはならないと思うのである。知的理解が深まるのが楽しい面白い経験を倍加させることとなってこそはじめて幼児に適当な指導ということができよう。

古今東西の沢山の優れた音楽の中から、幼児期にきかせたい曲を注意深く選択し、周到な指導のもとに音楽に親しませることによって音楽に対する豊かな感受性を養い円満な人間性が築かれる基礎の時としたいと思うのである。